

RSH:6

設計:acaa

仰角がつくる場の多様性

岸本和彦 | Kazuhiko Kishimoto

敷地の特性

周囲は比較的ゆとりのある敷地規模に一戸建住居がぼつぼつと建ち並ぶ環境である。遠くない将来は住宅街となることが予想されたが、設計を開始した時点では、まだ空き地が目立ち、長らく放置された空き地には草花があふれ、その上空を飛び回る鳥のさえずりがとても印象的であった。

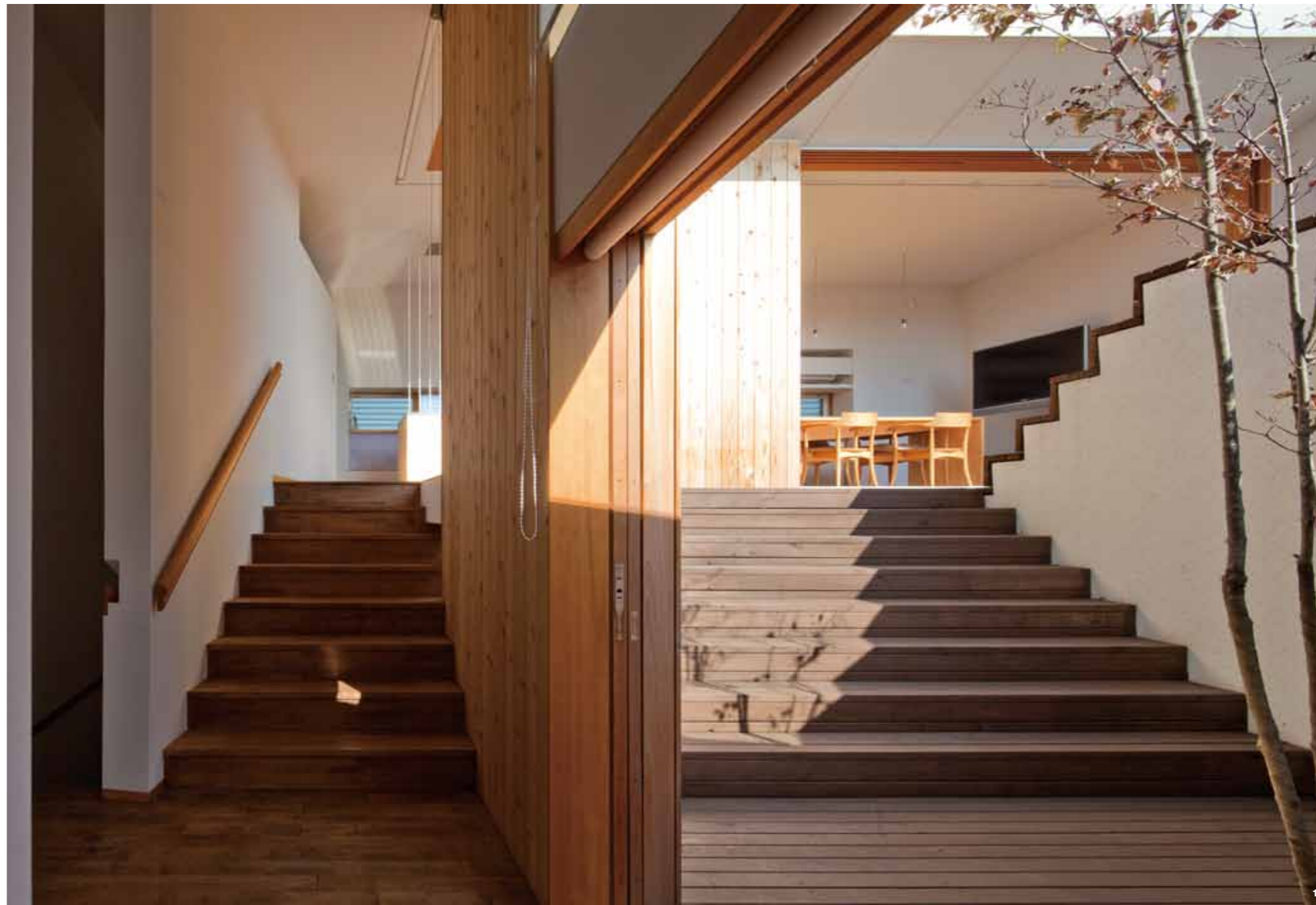
環境と建ち方

環境に対して適切な建ち方(スケールとカタチ)を与えることと、内部と外部の関係を生活に合わせて調整できる立体構成を提案することが重要であると考えた。それは適度な空間を隔てて住居同士が隣接するこの環境を良い意味で評価し、プライバシーの保持と開放性のバランスをきちんと見極めることであった。具体的な構成をスタディする時に重要なヒントとなったのは、既存敷地レベルが道路よりも700mm程度盛り上がっていたことだ。我々はそのレベル差を活かして一部に半地下空間を計画し、そこを基点として複数のスラブレベルを導き出した。それら複数のスラブを屋内と屋外を貫くデッキで結び、折れ曲がった一枚のパレットがプロポーションや明るさの異なる複数の居場所を結び付

け、シークエンスをつくり出す。

他者との関係

建物を外部から眺める時、多くの場合は見上げる。建物の中から中庭経由で空に接続する時も同じように見上げる。一方で日本の古典的空間構成に慣れ親しんだ我々は、どこまでも水平に流れていく透けた空間がとても開放的であることも承知している。我々は当計画にあたり、できるだけ仰角を抑えることに主眼を置いた。外観を低く抑えることや、複数の居場所が低い仰角で結ばれ、巡っていくと広い空へと接続されることが、他者との関係を緩やかにすると考えたからである。他者とは外部に広がる空や隣接する建物であり、自分を取り巻く人のことでもある。後者は状況によって人数も関係も異なる。その変化に対応するため、仰角による柔らかい結界を生み出した。中庭を経由して浴室やはなれの間はフラットに接続する。フラットであるが故に中庭との関係を強めながら、一方で圧倒的な外部という遮断性で距離感という結界を生み出している。つまり仰角の変化を用いて居場所の多様性を導き出している。とりわけ、浴室におけるINAXのタイル「アコルディ」は質感にあふれ、「ミスティキラミック」は色の選択肢が多いため、中庭と浴室の関係性に高い精度を与えることができたと思っている。



きしもと・かずひこ——建築家/1968年生まれ。1991年、東海大学工学部建築学科卒業。1998年、アトリエチンク設立。2007年、acaaに組織改名。2004年、東海大学・東京デザイナー学院非常勤講師。主な作品:RSH:2[2005]、RSH:3[2006]、湯河原の家[2006]、葉山の家[2008]、北鎌倉の家[2008]、SORANOEN[2009]など。

1——下の居場所から上の居場所を見る | 2——南面全景 | 3——外の居場所から見る | 4——上の居場所 | 5——浴室



1階平面図 1/250

2階平面図

建築概要

名称:RSH:6 | 所在地:神奈川県平塚市 | 家族構成:夫婦 | 敷地面積:161.53㎡ | 建築面積:51.68㎡ | 延床面積:118.36㎡ | 規模:地上2階 | 構造:木造 | 工期:2009.1~2009.8 | 設計:acaa | 施工:大同工業

●INAX使用商品 | 浴室 | 壁タイル:腰下:アコルディG ADG-150/215、腰上:ミスティキラミック プライト軸 SPKC-150/L00

A-A'断面図 1/250